【問題一】　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

20世紀の初頭、世界で初めて知能検査が開発された。それはフランスでの出来事だった。知的能力に関する研究を行っていた心理学者アルフレッド・ビネーは、フランス政府が招集した委員会メンバーの一員となった。そして、A ある目的のために知能検査を開発したのだった。

当時、フランスでは初等教育の無償化が始まり、多くの子どもたちが小学校に通学するようになっていた。ところがその中で、学校の授業についていくことが難しい子どもたちの存在が問題となっていた。そこで知的な発達の程度を測定し、授業についていくことが難しい子どもたちを小学校の入学前に見つけ出すテストが開発された。それが知能検査だったのである。ビネーは、この検査で知的な遅れのある子どもたちを見つけ出し、特別な教育を施すことを計画していた。

その後、アメリカの心理学者ルイス・ターマンが改訂して(1)フ及させたスタンフォード・ビネー式知能検査が、世界中に広まっていった。この知能検査は、もともとビネーによる知能検査では算出できなかった、今多くの人にとってなじみのある知能指数（ＩＱ）を算出できるという点に特徴があった。もともと知的な発達に問題がある子どもたちを見出すために開発された知能検査であるが、今でも(2)臨ショウの現場や教育現場、研究の現場では欠かせない重要な検査である。しかし当時アメリカに渡った知能検査は、子どもたちの問題に対処するためというよりも、優れた知性の特徴やその遺伝、家族歴を明らかにするために用いられるようになっていく。そしてこの検査は、当初の目的から大きく外れ、人種差別や性差別の根拠としても使われていくという、a の歴史をもっている。

さて、ニュージーランドの知能研究者ジェームズ・フリンは、この知能検査について興味深い現象を報告している。知能検査は定期的に改訂され、得点から知能指数への換算表も改訂される。フリンは、ひとつ前の知能検査と最新版の知能検査を同じ人物に対して行った場合、必ず前の版のほうが高い知能指数が算出されることを見出した。これは、新しい知能検査の問題が難しくなったわけではない。以前の世代よりも後の世代の人々のほうが、平均的に多くの知能検査の問題を解けるようになったことを意味している。フリンが見出した知能検査成績の上昇は、その名前をとってB フリン効果と呼ばれている。

フリン効果は、20世紀の私たちの社会が発展してきた様子を映し出している。20世紀を通じて地球上の多くの国で、就学年数が増加し、学業のスキルが向上し、栄養状態が改善し、都市化が進展することで刺激の多い社会が到来し、さまざまな高度な技術が必要とされる職業が増加してきた。このような社会全体の進展が、全体的な知能の向上にかかわっていると考えられる。

なお、20世紀終わり頃になるとフリン効果が見られなくなっているのではないかという指摘もなされている。しかしその一方で、21世紀に入ってからもやはりフリン効果は続いており、それは先進諸国よりも発展途上国で(3)ケン著に見られるという報告もある。やはり、社会環境が発展してくるのと同時に、全体的な知能検査の結果も向上してくるという現象は普遍的に見られるようである。

C これは、スポーツの技術的な向上の話によく似ている。誰かが新しい技を編み出すと、次第に他の多くの人もその新しい技術を学びはじめ、すぐに全体的な競技技術の向上が見られるようになる。また、新しい科学的なトレーニングの開発、オンラインの動画で詳細な競技場面を見て技術を学ぶことができるような環境、ビデオゲームなどでその競技を俯瞰（ふかん）して見ることにより、競技中には見ることができない視点からその競技を客観的に見ることができるようになるなど、そのスポーツだけの環境ではなく、あらゆる環境が競技の技術向上に影響を与えていく。このような環境の変化が全体的に、レベルの向上へと結びついていくのである。知能検査の成績の向上についても、この例と同じようなことが言える。社会全体が発展することは、私たちの能力の向上にも影響を及ぼすのである。

もっと昔の人々のＩＱはどうなのだろうか。たとえば、レオナルド・ダ・ヴィンチのＩＱは２２０、アインシュタインのＩＱは２０５、ニュートンのＩＱは１９５……こういった話を聞いたことはあるだろうか。

ＩＱは知能検査で測定される。そして、知能検査は20世紀になって開発された。しかも成人の知能指数を算出できるようになったのは１９３９年のウェクスラー式の知能検査が開発されてからであり、今も版を重ねているウェクスラー成人知能検査（ＷＡＩＳ）が開発されたのは１９５５年のことである。ということは、その年以降に生きている人でないと、ＩＱを算出することはできないはずである。そして、ビネー式でもウェクスラー式でも、知能検査で算出できるＩＱの数値は、せいぜい１６０くらいまでである。アインシュタインの没年は１９５５年だが、果たして生きている間に知能検査を受けた記録は残っているのだろうか。また、一般的によく使われる知能検査では、ＩＱ２０５という数値はそもそも算出できないはずなのだが、どうしてそういう数値が伝わっているのだろうか。

アメリカの心理学者キャサリン・コックスは、１９２６年に公刊された書籍の中で歴史上の偉人たちのＩＱを推定している。コックスは、「天才」と言われる人々は、若い頃にどのような育ち方をするのか、ということに興味を抱いていた。そして、１４５０年から１８５０年の間に生きていた偉人たち３０１名の記録をひもといていった。選ばれた偉人たちには、政治家、哲学者、作家、宗教家、芸術家、音楽家、そして科学者たちが含まれている。知能指数は、児童期や思春期の頃、そして成人期になった頃のエピソードから推定されている。この年代の偉人たちは、もちろん知能検査を受けてはいないので、伝わっているエピソードから知能指数を推定したということである。知能指数が高く推定されたグループには、ジョン・スチュアート・ミル（若い頃１９０、成人１７０）、ゲーテ（若い頃１８５、成人２００）、ライプニッツ（若い頃１８５、成人１９０）、パスカル（若い頃１８０、成人１８０）などが名前を連ねている。しかしリストの中には、今ではあまり名前が知られていない偉人も多い。

この書籍を読むと、コックスが非常に真摯（しん）な態度で知能指数を推定しようとしていることがわかる。生活史と知能指数とを、できるだけ学問的に結びつけようとした努力が随所に見られるからである。ただし、D そのことと知能指数の推定が正しいかどうかは別である。知能検査を受けていない以上、推測の域を出ることはない。

なお、コックスの本の中でレオナルド・ダ・ヴィンチのＩＱは１３５（児童期）と推定されており、２００を超える値からは程遠い。では、どこからダ・ヴィンチのＩＱが２２０だという話が出てきたのだろうか。おそらく、コックスを真似たのちの著述家の書籍の中に書かれた記述に基づくのではないかと思われる。なぜコックスのリストとのちの著述家たちのリストでＩＱが大きく異なるかというと、コックスが偉人たちの生活史をタン念[4]に調べているのに対し、著述家たちの推定では成人になってからの業績を大きく加味して推定しているからだと考えられる。これでは、たまたま成功した人や不運に見舞われた人の知能を過大、過小に推定してしまうことになる。

いずれにしても、検査が存在しない時代に生きた人々の数値を推定することは、いかに難しいかがよくわかる例である。

調査方法や検査手法が開発されておらず、その当時のデータが残っていない昔の人々については、なかなかその数値を推定することは難しい。それでも、喫煙者のイメージのような印象の変化や、知能のような能力の変化の話は、比較的わかりやすい。

では、人々の性格はどうなのか。時代によって変わっていくものなのだろうか。

２０１８年にアメリカで公開された映画『ファースト・マン』で俳優ライアン・ゴズリングが演じた、月面に初めて降り立った宇宙飛行士ニール・アームストロングは、とても寡黙で話をするときにも表情を崩さず、我が子や同僚の死に直面してもほとんど動揺する様子を見せない。映画全体も、起きている出来事[5]がゲキ的であるのに対し、非常に静かな印象を与える。

その一方で映画『スター・ウォーズ』の第1作、エピソード4で描かれているルーク・スカイウォーカーは、感情を隠すことなく表に出すように見える。憤りを隠すことなく表出し、明るく短気で我慢が足りない１９７０年代当時の若者の典型像が描かれているように思えてくる。

ニール・アームストロングは１９３０年生まれで、映画では１９６０年代の様子が描かれている。もちろん、そこには２０１８年の時点から１９６０年代を見た様子が映し出されているのかもしれない。しかし、昔ながらの男性観や家族観は、その当時に色濃く残っていたであろうことも想像される。その一方でスター・ウォーズのエピソード4は１９７７年に公開されており、１９６０年代から70年代のヒッピー文化を経た若者の［ b ］さが表れている印象がある。もっとも、その後、ルーク・スカイウォーカーは修行を経てジェダイとして成長し、［ c ］のしかたを学んでいくのであるが。

もちろんこれらは、あくまでも映画の中の登場人物の話であり、[E]その時代の典型的な様子を映し出しているに過ぎない。しかし、やはり時代によって、人々の平均的な性格のありようは変わっていくように思われる。

では記録が残っている最近でも、時代によって性格特性の得点が変化する様子が観察されるのだろうか。そして実際に研究を行っていくと、どのようなことがわかるのだろうか。

アメリカの心理学者ジーン・トウェンギらは、先ほど紹介した[F]フリン効果と同じような分析手法を用いて、さまざまな心理的な特性の時代変化を検討している。具体的には、過去の論文の中で報告される性格特性の平均値を集め、時代ごとにその数値を統合していくのである。すると、昔の平均値と今の平均値を比較することができる。過去の文献から数値を探す、まるで宝探しや遺跡発掘のような作業を行っていく点が興味深い研究手法である。トウェンギはこのような分析手法を、時間横断的メタ分析と呼んでいる。

たとえば、１９７９年から２００６年にかけて、アメリカで行われた調査の結果を見ていくと、次第にナルシシズム的な傾向が強くなっているという。アメリカでは自尊感情についても時代とともに平均値が上昇しているという結果が報告されており、全体的にポジティブな自己認識をする傾向になってきたことがうかがえる。

トウェンギたちは、１９８０年代から行われてきた自尊感情を高める子育てや教育の影響について述べている。自尊感情を高めようとすることは、もちろん決して悪いことではない。ただし、[G]それ自体を目的とすることは、あまり勧められることではない。自尊感情はある種のメーターのようなものであり、現実のさまざまな生活の状況が良くなったり、自分自身をとりまく状況が良くなったりすると、上昇する。学業成績が良くなれば上昇するし、悪くなれば下降する。また友人関係が良好になると上昇するし、悪くなれば下降する。それは、状況が変化することに伴って、メーターが上下するようなものである。ところが、スピードメーターをいくら操作しても、実際のスピードは上昇しないのと同じように、自尊感情そのものを操作しても、現実の生活が良くなるとは限らないのである。

自尊感情とナルシシズムは、互いにプラスの相関関係にある。ということは、たとえ自尊感情を伸ばそうとしても、一緒にナルシシズムも高くなってしまう可能性があることを意味している。ナルシシズムを伸ばすことなく、自尊感情だけを高めることは、そうそう簡単に、できることではない。

１９３８年から２００７年にわたる性格特性の得点の変化を検討した研究がある。検討に用いられたのはミネソタ多面人格目録（ＭＭＰＩ）と呼ばれる性格検査である。これは１９３０年代から１９４０年代前半にかけてアメリカで開発された検査であり、現在もその改訂版が出版されている。世界中で翻訳され、もっとも使用された実績をもつ性格検査だと言われている。

ＭＭＰＩは、多面的に複数の性格特性を測定することができる。そして時代の変化との関連を検討したところ、次のような結果が見出された。

心気症傾向（Hs）は、健康状態について心配する傾向を表す。そしてこの性格特性は、大学生でも高校生でも、最近になるほど高い得点を示す傾向を示していた。また落ち込みや不適応の程度を表す抑うつ（D）も、調査年が最近になるほど得点が上昇する傾向を示していた。さらに、反社会的な傾向を意味する精神病質的偏倚性（Pd）や過剰な活動の傾向を表す軽躁性（Ma）などについても、近年になるほど平均値が上昇する傾向が示されている。

全体的な結果を見ると、アメリカの高校生や大学生たちは、時代を経るにつれて次第に精神的な問題を呈しやすくなっているのではないかと思われる。近年特にメンタルヘルスの問題を抱えた若者が増えていることや、高校や大学での相談室への来室の多さなどが、これらの結果に関連しているのではないかと論文の著者たちは推測している。

ところで日本では、子どもたちや若者たちの自己肯定感が低下しているのではないかということがよく話題にのぼる。自分自身を肯定することは心理的

な状態として重要であり、自分自身をポジティブに捉えることは望ましいことだと考えられている。しかし、諸外国に比べると、日本の子どもや若者たちが自分を肯定する程度は低く、しかも最近はさらに悪化しているのではないかという印象が、子どもたちや若者たちと日常的に接する人々の間では問題視されている。

さて、日本人の自尊感情の平均値は諸外国に比べてとても低いレベルにある。

ではほんとうに、最近になるほど自尊感情は低下しているのだろうか。

筆者らは、時間横断的メタ分析を用いて、日本人の自尊感情の平均値が近年低下傾向にあるのかどうかを検討したことがある。１９８０年から２０１３年までに日本で刊行された論文を対象に分析を行った結果、全体としても、また成人期、大学生、中高生それぞれの年齢段階でも、近年になるほど自尊感情の平均値は低下する傾向が見られた。やはり、近年になるほど自尊感情の平均値は低下傾向にあることがわかる。

筆者自身、実はこの研究を始めた当初は、自尊感情の平均値が最近になるほど低下しているとは思っていなかった。しかし分析結果を見て非常に驚いて、論文を執筆したことを覚えている。研究者たちは、平均値を高めようとか低めようと考えて調査を行い、論文を執筆しているわけではない。研究者はそれぞれ、目の前の課題に対して研究を行っているだけである。ところが、ひとつひとつの研究結果を収集して並べていくと、全体的に自尊感情の平均値が低下していく様子が観察されるのである。

（小塩真司『性格とは何か』より）

問一　傍線部（1）～（5）のカタカナに該当する漢字を含む熟語として最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

（1）フ及　①流布　②賦役　③豊富　④普請

（2）臨ショウ　①床屋　②相手　③反照　④証拠

（3）ケン著　①露顕　②検察　③実験　④堅調

（4）タン念　①極端　②鍛錬　③丹色　④反物

（5）ゲキ的　①過激　②悲劇　③攻撃　④間隙

問二　傍線部Ａ「ある目的のために知能検査を開発したのだった」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

①　初等教育の無償化が始まって、多くの子どもたちが小学校に通学するようになったため、知的能力の検査が必要となった、ということ。

②　知的な遅れのある子どもたちに特別な教育を施すために、小学校の入学前に知的な発達の程度を測定する検査が必要となった、ということ。

③　優れた知性の特徴やその遺伝、家族歴を明らかにするために知的能力の計測を可能とする知能検査が開発された、ということ。

④　知能検査の開発には人種差別や性差別の根拠を否定するという目的があり、そのために知能指数という指標を算出した、ということ。

問三　空欄 a ～ c に当てはまる最も適切な四字熟語を次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

空欄 a　①夏炉冬扇　②博引旁証　③紆余曲折　④離合集散

空欄 b　①自由奔放　②虎視眈々　③二律背反　④自家撞着

空欄 c　①無為自然　②大所高所　③外交辞令　④自己制御

問四　傍線部Ｂ「フリン効果」の内容を説明したものとして不適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

①　ニュージーランドの知能研究者ジェームス・フリンが発見した知能検査に見られる興味深い現象に与えられた名称である。

②　知能検査の問題は定期的に改訂されるが、知能指数への換算指数もそれに併せて改定されるという効果の名称である。

③　知能検査の難易度は変わらないのに、同一人物に知能検査を行うと必ず前の版の検査の方が高い知能指数が算出されるという現象の名称である。

④　以前の世代の人々よりも後の世代の人々の方が、平均的に多くの知能検査の問題を解くことができるようになっている現象の名称である。

問五　傍線部Ｃ「これは、スポーツの技術的な向上の話によく似ている」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

①　誰かが新しい技を編み出すと、多くの人がその新しい技術を学ぶことによって、全体の競技技術の向上が見られる、ということ。

②　新しい科学的なトレーニングの開発によって、その競技を俯瞰することが可能になり、その技術を客観的に判断できる、ということ。

③　スポーツの技術的な向上においては、スポーツの環境に限らず、あらゆる環境が競技の技術的な向上に影響を与えることになる、ということ。

④　知能検査の向上には、スポーツにおける全体的な環境の向上がレベルの向上に結びつく例と同様に、社会全体の発展が影響する、ということ。

問六　傍線部D「そのことと知能指数の推定が正しいかどうかは別である」の理由として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

① 知能検査は20世紀になって開発されたため、それ以前の人物のＩＱを算出することはできないが、コックスは非常に巧妙な手法を駆使してＩＱを推定することに成功したが、知能指数が高かったと推定された偉人の多くが現在は知られない人物であったから。

② 知能指数は児童期や思春期の頃、そして成人期になった頃のエピソードから推測することができるが、その結果、コックスの研究では歴史上の人物の知能指数について「若い頃」と「成人」の時期で数値が異なってしまうという欠点が内包されてしまったから。

③ コックスは著書の中で歴史上の人物について生活史と知能指数とを可能な限り学問的に結びつける真面目な努力を行っているが、ＩＱは知能検査から算出されるものであり、原理的には知能検査が開発される以前の歴史上の人物のＩＱは「推定」に過ぎないから。

④ コックスの著書の中でレオナルド・ダ・ビンチのＩＱは１３５（幼少期）と推定されたが、２２０であるとする推定値もあり、歴史上の人物のＩＱの推定においてはたまたまの成功や不運を過大・過小に推定してしまう傾向があり、その推定値の正確性に疑問が残るから。

問七　傍線部E「その時代の典型的な様子を映し出しているに過ぎない」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

① 映画の中に描かれたキャラクターは、いずれも映画が作成された時点から回顧されて捉えられた性格特性を強調するという構造になるため、映画の中で描かれる人物像を理解する上で、「現代」という視点から切り離すことはできない、ということ。

② 『スター・ウォーズ』は映画の公開が１９７７年であるため、１９７０年代の若者の感情を表出することができているが、『ファースト・マン』では映画が扱う時代と映画の制作年代が大きくずれているため、後者の人物造形には限界がある、ということ。

③ 映画の中に描かれたニール・アームストロングには１９６０年代の、ルーク・スカイウォーカーには１９６０年代から７０年代における人々の性格の最も特徴的な部分を映し出しているので、それが当時の人々の平均的な性格であったとみることはできない、ということ。

④ 『ファースト・マン』には伝統的な男性観や家族観が描かれており、『スター・ウォーズ』のルーク・スカイウォーカーにはヒッピー文化が投影されているが、映画のキャラクターというものはこのような文化を投影する装置に過ぎないと理解しなければならない、ということ。

問八　傍線部F「フリン効果と同じような分析手法を用いて」の内容の説明として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

① 知能検査の世代ごとの平均的な知性の分析を行った手法を、世代ごとの平均的な「性格」の分析に応用する、ということ。

② どの版でも知能検査から算出される知能指数の平均値は変わらないという原理を「性格」の分析に活用する、ということ。

③ 版の異なる知能検査であっても、同一人物の知能指数は変わらないというフリン効果の特性を応用する、ということ。

④ 知能検査が行われていなかった時代の人々の知能指数の算出を可能とするフリン効果の効能を援用する、ということ。

問九　傍線部G「それ自体を目的とすることは、あまり勧められることではない」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

① 時間横断的メタ分析という手法は、世代ごとの性格特性の平均値を比較するという手法ではあるが、その結果、アメリカでは次第にナルシシズム的な傾向が強くなってしまったように、この手法は性格特性を変化させてしまうので、それを目的とする利用はすべきでない、ということ。

② 自尊感情を高めるということは、例えるならばスピードメーターを操作することでスピードの感じ方を変えるような影響を与えることになるので、それでは実際のスピードが計測できないように、逆に自尊感情そのものが把握できなくなるので勧めることができない、ということ。

③ 全体的にポジティブな自己認識をする傾向と、自尊感情という性格特性は表裏一体のものであるので、ナルシシズムの問題が発生する自尊感情を高めることを目標とするのではなく、ポジティブな自己認識という性格特性を獲得することを目標とした方がよい、ということ。

④ 自尊感情を高めることは悪くないが、それに伴ってナルシシズムの傾向もともに高まる可能性があることと、自尊感情は状況の変化に伴うものなので、自尊感情が現実の生活を良くすることはないため、自尊感情を高めることを目標とすべきではない、ということ。

問一〇　次のイ～ニについて、本文の内容と合致するものには①、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。

イ　アインシュタインの没年は１９５５年なので、１９３９年に完成したヴェクスラー式の知能検査によって、ＩＱは２０５と算出される。

ロ　アメリカの心理学者ジーン・トウェンギらの時間横断的メタ分析と呼ばれる分析手法は性格特性の平均値を算出し比較する分析方法である。

ハ　ミネソタ多面人格目録（ＭＭＰＩ）と呼ばれる性格検査を用いて１９３８年から２００７年までの性格特性の変化を検討した結果、近年になるほどメンタルヘルスに問題を抱えた若者が増加していることが分かった。

ニ　日本人の自尊感情の平均値を時間横断的メタ分析という手法で分析したところ、予想の通り、自尊感情の平均値が最近になるほど低下傾向にあることが分かり、時間横断的メタ分析という分析手法の正確さが立証されることになった。

【問題二】 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

人間が文字という記号を考案し、自己の考えや周囲の出来ごとを記録しはじめたのは人間の歴史全体の中でみると比較的最近のことに属する。文字の発明に至る以前に、人間は万のオーダーで数えられる長い歴史の過程を経過してきているのだが、その間のさまざまの出来ごとは、文字発明以降の人間の歴史の持つ華やかな色どりによってか、あまりわれわれの注目を引かないことが多い。

A 歴史はシュメールに始まる、という有名なことばにもあるように、シュメール人によってはじめて文字が用いられるようになって以来、それ以前の無文字の段階とくらべどれほど豊かな人間に関する情報をわれわれが入手できるようになったかは計り知れないものがある。暗いトンネルを抜けて輝く草原に歩を進めるときのように、文字は過去の人間の思想や行動についての豊かな情報をわれわれにもたらすことは、世界のいずれの古代文明の場合についてみても明らかなことである。それ故、人間の歴史において、文字発明以降を歴史時代、文字発明以前の段階を広く先史時代として区分する考えかたも、あながち理由のないことではない。

こうした文字使用の有無によって人間の歴史を二大別する方法は近世ヨーロッパにおいて確立し、一方は歴史学として発達し、他方は先史学、考古学、人類学の領域として各々別々に固有の学問を発達させていったのであり、この二つの時代を研究する学問は、今日においては一見すると全く異なった学問体系を作りあげているようにみられるほどである。しかし考えてみるに、全体として本来一本のものであった人間の歴史を、文字のあるなしという点で二つに区分してしまうという方法は、はたして歴史を研究するといううえからみて良い方法といえるのであろうか。

たしかに、文字がある時代においては、文字によって残されたさまざまな記録を中心に歴史を研究していくことが一番有効な方法であるわけだし、文字が存在しない時代においては、人間が作り出したものや、人間が周囲の自然に働きかけた行為の痕跡といった、いわば物的証拠にもとづいて人間の歴史を考えていかねばならないわけで、そこにはそれぞれ異なった研究上の手続きや技術が必要とされることはまちがいない。

そしてそうしたことが、学問の専門分化という時代の要請によって、より細分化・専門化していったということも十二分に理由のあることだったといえる。しかし、そのような傾向が今後とも人間の歴史を考えていくうえで必要なことだというように固定して考えてしまって良いかどうかは別個の問題といえるだろう。

最近よくいわれる通専門領域の研究（インターディシプリナリースタディー）ということばも、個々の学問があまりに細分化・専門化されたためにかえって硬直化し、問題解決に有効な形で接近することができなくなってきた点の反省として生まれてきたと解するならば、B 人間の歴史を研究する諸分野においても同じようなことがいえるのではないだろうか。

そうした点から、先史時代・歴史時代という伝統的な区分のしかたについても、もう一度ながめなおしてみる必要があるように思うのである。

文字の発明ということが、人間の歴史の中での重要な出来ごとであったことは、以上の点からだけでも理解することができるが、実は人間は文字発明以前にそれと同じように重要な出来ごとを達成しているのである。それはことばの使用である。ことばを使用することによって人間は相互間の意志をより有効・適切に伝達しあうことができるのであり、これは人間が社会的集団を形成する中で極めて重要な役割をはたしたにちがいない。たとえば、人間集団がある一定目的に従って行動しなければならない場合、ことばによる情報の伝達は極めて重要だったであろう。

このような機能を持つことばが、人間の歴史のいつごろから話されるようになったかは今日十分明らかにされていない。サルはことばを話すことができないから、サルに近似した骨格上の特徴を残している初期の人類はおそらく今日われわれが話すような会話を行なうことができなかっただろうと考える傾向がつよいが、それではいつごろから可能であったかという点になると意見の一致がみられない。

この点を明らかにするための方法は大きく分けて二つあるように思われる。一つは口腔（こうくう）・咽喉（いんこう）・おとがいなどの骨格上・形態上の特徴をサル・現代人と比較しながら、ことばを話せる（発音することができる）ような形態上の特徴を人間がいつから獲得することができるようになったかを類推したり、脳容積の増加する割合によって言語中枢の発達を類推したりする方法で、いわゆる形質人類学が従来主として扱ってきたものである。いま一つの方法は文化史的な接近法で、これは先の研究のようにすでに一定の研究のつみかさねがあるわけではなく、C ほとんど未開拓の分野である。

人間がことばを話すということは少なくとも、ある特定の音節を発音することができ、そのいくつかの音節をある一定のしかたで組み合わせ、しかもその組み合わさった音節をある特定の事象に対して限定的に用いるということについての人間相互間での了解が成立していなければならない。そうした約束がなければことばによる人間相互の意思ソ通(1)は不可能となる。こうしたことが可能になれば、ことばを仲介として、ある一定の情報が、人から人へと空間的に拡大し、親から子へというかたちで時間的に伝達されていく。つまり同一の情報を共有しうる人間集団が、時間的・空間的に拡大されることになる。

そこで、ある一定の情報ということを、より具体的に、ある品物を作るための技術とか、ある食料を獲得するための知識というようなものとしてみよう。ある品物を作るための技術が、多くの人々に共有されれば、そこには同一の製法にもとづく――従って出来あがりもほぼ相似した形態をもつ――一群の品物が残されることになろう。われわれはそうした D 一定の規格化された製作物が存在する場合それを「型式」と呼ぶ。つまり型式はものを作るにあたって一定の知識・技術を共有する人間集団によって社会的に作り出されたものであると考えるわけであり、そうした知識・技術の共有は、おそらくことばを(2)バイ介としなくては成り立たないのではないかと考えるわけである。

だいぶまわりくどい説明になってしまったが、以上のような考え方から、人間の作り出したさまざまなもの――主として道具――を型式にまとめ、その型式がどのように複雑化していくかという過程を追いながら、ことばを話す能力の発達過程を類推しようとするわけである。ただ、この方法は先にのべた形質人類学的な接近法にくらべ、より間接的であり、これがはたして有効な方法といえるかどうかは今後共十分な検討を重ねる必要がある。

人間がいつごろからことばを話しはじめたかを明らかにする二つの方法は、現在われわれに十分な成果を必ずしも示してはくれない。しかしことばの使

用は文字の使用よりも、さらに長い発達の前史を持っていたことは疑いを入れないところである。文字の発明ということも、そうしたことばの使用という長い揺籃期を経過したうえで、はじめて可能なことであったといえるのだが、この二つの重要な出来ごとは人間の歴史において、一体どういう要因によって起こったことなのであろうか。

この要因は、生物としての人間の中に、すでに可能性として宿されていたものであり、進化の過程においてある意味では必然的に開花したものなのか、それとも人間が自然に対して働きかけていく過程で自らが獲得していったものとしても考えられるものなのであろうか。

ことばのはじまりと文字の使用という二つの出来ごとが、人間の文化の発達上極めて重要な役割を持っているにもかかわらず、われわれはそのことについて多くを語り得ないのである。

こうしてみると、いわば先史時代として(3)一カツされ、歴史の教科書の中ではほんの冒頭の一節としてしか語られない部分に、実は人間の歴史の中で極めて基本的ともいえることがらが形成されていたことに気づくのであり、これはちょうど、幼児期までの体験が、一人の人間の将来に大きな影響を与えずにはおかないのと同じことがいえるのではないだろうか。

そのような点からも、人間の歴史を文字のあるなしで区別したり、それぞれの分野が独自な学問領域を形成している現在の状況は、早晩改められなければならない。むしろ、人間の歴史の研究には、大別して二つの接近法が存在するのであり、一つは文字化された資料にもとづいて研究を行なう方法――これは狭義の文字史学とでも仮称しよう――であり、いま一つは文字化されていない物的資料にもとづいて研究を進める方向があり――これは考古学・先史学・民族（俗）学などを統合した無文字史学とでも仮称しておこう――両者はそれぞれ相互に補い合って人間の歴史の全体像に迫ることができるというように考えたほうが良いのではなかろうか。換言すれば、歴史の研究は、この二つの接近法を使い分けたり併用することによって、より有効な形で進めることができるのではないだろうか。

このような歴史の研究というものが具体的にどのようなものとして体系化されるかは現在のところまだ明確に示すことはできないものの、いくつかの端緒はすでに存在する。たとえばアメリカ・イギリスなどでは最近、産業革命考古学（Industrial Archaeology）という一分野が発達しているが、これは産業革命当時の工場・工房などを調査し、その規模や構造を明らかにしようとする意図を持っているのであり、この方面の調査によって産業革命当時の産業のあり方について従来の記録の空白を有効に補っているという。筆者も、たまたま海外留学の機会に、アメリカ東部における産業革命時代の遺跡調査を見学することができたが、そこは鉄砲工場の跡であった。発掘を担当していた助教授はエッチング風の工場風景がえがかれている一枚の絵を示し、これがその工場跡に関する唯一の文献記録であると説明してくれ、発掘によって(4)ロ出した工場の土台石や、さびた鉄の道具の破片を示してくれた。その時彼が、鉄の道具の破片を私に見せながら、たかだか一〇〇年くらい前に使われていたものなのに、われわれはこれが何の部分品なのかわからないのです、といったことばが、私にとっては印象に残っている。産業革命考古学という分野の出現は、考古学が、文字のない古い時代のみを専門とするものではなく、現代に近

い時代の歴史の研究にとっても有効なものであることを示すもっとも端的な事例である。

このほか中世考古学（Medieval Archaeology）だとか水中考古学（Underwater Archaeology）といった聞きなれない呼び名を持った考古学の分野がいろいろ登場してきている。これらは現在のところ個々別々なかたちで存在しており、学問の細分化傾向にカ担しているかに見えるが、やがてはこれらの諸分野は一つのまとまりとして体系化されて無文字史学を形成し、従来から存在する文字史学（いわゆる狭義の歴史）とともに、より大きな人間の歴史に迫るものとして整備されるようになるのではないだろうか。

（鈴木公雄『考古学はどんな学問か』より）

問一　傍線部（1）～（5）のカタカナに該当する漢字を含む熟語として最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

（1）意思ソ通　①素人　②疎外　③清楚　④定礎

（2）バイ介　①某国　②触媒　③煤煙　④陪席

（3）一カツ　①克己　②枯渇　③活躍　④括弧

（4）ロ出　①炉心　②路傍　③煙霧　④朝露

（5）カ担　①価格　②認可　③集荷　④果実

問二　傍線部A「歴史はシュメールに始まる」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

① 人間は万のオーダーで数えられる長い歴史の過程を経過してきているが、その間のさまざまな出来ごとは、文字発明以降の人間の歴史の持つ華やかな色どりによって注目を引かないことが多いため、シュメールの歴史を忘れないための警句である、ということ。

② 古代文明のほとんどは無文字の文明であるため、その文明の詳細は未詳であるが、その中でシュメール人の過去の思想や行動についての豊かな情報を理解することができたので、このシュメールの情報から学問としての歴史の探求が始められた、ということ。

③ 人間の歴史において文字発明以降を歴史時代と区別するのは、文字が過去の人間の思想や行動についての豊かな情報をもたらすからであり、その文字をはじめて用いたのがシュメール人であるため、歴史時代はシュメールから始まる、ということ。

④ 人間が文字という記号を考案して、自己の考えや周囲の出来ごとを記録し始めたのは人間の歴史全体の中でみると比較的最近のことに属するが、その文字による記録から初めて歴史を探求したのがシュメール人であった、ということ。

問三　傍線部B「人間の歴史を研究する諸分野においても同じようなことがいえるのではないだろうか」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

① さまざまな学問分野において細分化・専門化がされてきたのには、時代の要請という十二分な理由があり、それぞれに異なった研究上の手続きや技術を発達させたように、歴史の研究においても同様に、細分化・専門化という時代の要請に応える必要がある、ということ。

② 学問が細分化・専門化されたために硬直化し、問題解決に有効な形で接近できなくなった反省として「通専門領域の研究（インターディシプリナリースタディー）」が提唱されているということであれば、歴史研究を文字の発明の前後に分けてそれぞれに固有の学問を発達させてきたことへの反省が促される、ということ。

③ 「通専門領域の研究（インターディシプリナリースタディー）」という考え方は、歴史の研究において、細分化・専門化されたことへの反省として提唱された研究の考え方で、問題解決のために諸分野の研究成果を、全体として本来一つであった人間の歴史として研究する方法が一般化することになる、ということ。

④ 人間の歴史を文字発明以前の先史時代と、文字発明以降の歴史時代と、大きく二分して細分化・専門化して探求する傾向は依然として人間の歴史を考える上で必要な方法であるが、その方法に固定して良いか否かはまた別の問題として考える必要がある、ということ。

問四　傍線部C「ほとんど未開拓の分野である」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

① ことばの使用が人間が社会的集団を形成する中でどのような役割を果たしたのかという研究は全くされていない、ということ。

② 情報の伝達のためのことばの使用が、人間の歴史のいつごろから始まったのかという問題については未解決である、ということ。

③ 形質人類学の手法による研究によっても、人間がサルとは異なることばの使用を始めた時期の特定には到っていない、ということ。

④ 人間がいつからことばを使用したかという問題を文化史的な研究によって探求する分野の成果の蓄積はほとんどない、ということ。

問五　傍線部D「一定の規格化された製作物」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

① 同じ製法で作られた同一の形態をもつ製作物を時系列で理解することで「型式」に整理された製作物。

② 空間的にも時間的にも伝達可能なかたちに整えられた技術によって製作された、時間的・空間的に偏在する製作物。

③ 一定の知識・技術を共有する人間集団によって社会的に作り出される、ことばによって共有された技術による製作物。

④ ある品物を作るための一定の情報を同一の製法として整えることで、できあがりがほぼ相似した形態をもつ一群の品物。

問六　傍線部E「この二つの重要な出来ごと」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

① 人間がことばを使用しはじめたことと、その長い使用を経過して文字を発明したという二つの出来ごと。

② 人間がことばを使用した歴史を明らかにする形質人類学と文化史的研究という二つの学問の完成という出来ごと。

③ ことばを話す能力の発達過程と人間が作り出したさまざまなものの型式の複雑化の過程が一致するという学問的な発見。

④ 人間にはことばを使用する生得の能力があるという事実と、自然に対する働きかけの過程で獲得した能力があるという発見。

問七　傍線部F「人間の歴史の研究には、大別して二つの接近法が存在する」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

① 人間の歴史を研究する上で、文字の発明される以前の歴史と以後の歴史と区別し、前者は先史学・考古学・人類学の領域として固有の学問体系があり、後者は文字資料によって構築される一般的な歴史の体系がある、ということ。

② 人間の歴史を探究する学問は、時代の要請として細分化・専門化された学問領域とその領域における問題解決の方法があり、もう一方では逆にそれらを再び統合する「通専門領域の研究（インターディシプリナリースタディー）」という問題解決の方法がある、ということ。

③ 人間の歴史をことばの使用と文字の使用とに大別し、前者については形質人類学を援用してことばを話せるような形態上の特徴の獲得時期を特定し、後者については文化史的な手法で知識や技術の獲得と共有をあとづける方法がある、ということ。

④ 人間の歴史を研究するためには、一つは文字化された資料にもとづく、狭義の文字史学という方法と、文字化されていない物的資料にもとづく、考古学・先史学・民族（俗）学などを統合した無文字史学という二つのアプローチがある、ということ。

問八　傍線部G「産業革命考古学（Industrial Archaeology）という一分野」の特徴を説明したものとして不適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

① 産業革命当時の工場・工房などを調査して、従来の記録の空白を補って、その規模や構造を明らかにしようとする学問分野である。

② 産業革命時代の遺跡の発掘調査などによって得られた文字化されていない資料を活用して理解を深めようとする学問分野である。

③ 考古学というと文字の発明される以前の古い時代を専門とすると思われるが、産業革命の時代の歴史研究にも有効な手法である。

④ 産業革命時代以前の文字資料を扱う文字史学と、文字化されていない物的資料による無文字史学を統合した学問分野である。

問九　傍線部H「聞きなれない呼び名を持った考古学の分野がいろいろ登場してきている」の理由を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

① 考古学という学問は、人間が文字という記号を考案して自己の考えや周囲の出来ごとを記録する以前の長い歴史を探究する学問分野であるが、学問の専門分化という時代の要請によって、より細分化・専門化した新しい考古学が必要とされているから。

② 文字以前の歴史の探究は未開拓の分野とされるが、従来の研究方法である形質人類学の手法と文化史的な研究において、考古学上のアプローチの有効性が確認されたことにより、これらの学問を結びつけた新しい考古学が乱立するようになったから。

③ 文字のない古い時代を対象とする考古学の研究手法を、現代に近い時代であっても、文字化されていない物的資料にもとづいて行う研究において実践することで、記録の空白を有効に補うことができることが理解され、その応用が実践されているから。

④ 従来から存在する文字史学（いわゆる狭義の歴史）の研究の限界が認識され、より大きな人間の歴史の全体像に迫るためには、考古学の知見と文字史学による学問の細分化の傾向にシフトしたため、新しい考古学が要請されることになったから。

問一〇　次のイ～ニについて、本文の内容と合致するものには①、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。

イ　人間の歴史を文字発明以降を歴史時代、文字発明以前の段階を先史時代と区別する考え方は完全に正しい判断であった。

ロ　人間の歴史の中でいつごろからことばを話すようになったかは、今日十分に明らかにはされておらず、意見の一致は見られない。

ハ　先史時代とまとめられる時代は、歴史の教科書の中ではほんの冒頭の一節に過ぎないが、文字の発明そしてその利用という歴史時代に先行するこの時期は人間の歴史の中で極めて基本的ともいえることがらが形成されていた時代である。

ニ　産業革命時代の工場の跡地から発掘されるさまざまな道具の破片などは、すでに今日ではそれが何のために作られ、どのように機能したのかを特定することができなくなっている状況にあり、文字による記録の重要性がより高まっている。